

重要文化財光明寺本堂(大殿)は 保存活用修理工事(半解体修理)を行っています。

(令和4年8月31日発行)



2019(令和元)年11月から進めている本堂(大殿)保存活用修理工事は、前号にて銅板葺屋根取り外し着手をお知らせしましたが、現在(2022.8.29)すべての銅板の取り外しを終えて、野地板(のじいた)が現れています。また両妻(りょうづま)の破風(はふ)の中の壁と、破風板(はふいた)を覆っている銅板の取り外し、周囲の建具や正面の向拝(ごはい)軒廻り(のきまわり)と建具の飾金具(かざりかなぐ)を取り外しました。



写真1 正面向拝屋根の野地板



写真2 正面屋根の野地板



写真3 破風の中の壁の取り外し



写真4 破風板の銅板取り外し



写真5

屋根の側面側を妻(つま)、三角形の部分を破風(はふ)と呼び、斜めにかかっている板を破風板(はふいた)と言います。

また破風板にぶら下がっている5枚の板が懸魚(げぎょ)です



写真6 建具(正面桟唐戸(さんからと))の取り外し



写真7 建具(北面ガラス格子戸(こうしど))の取り外し



写真8 取り外した建具の格納



写真9 向拝の飾金具の取り外し



写真10 向拝唐破風(からはふ)の飾金具の取り外し前



写真11 同所の飾金具の取り外し



写真12 取り外した同所の飾金具



写真13 金具の取り付け痕の確認

解体を通じてわかったこと

1 向拝に唐破風(からはふ)が付け加えられた明和7年(1770)に、向拝軒廻り全体に飾金具が取り付けられしたこと。

唐破風が取り付けられた時期は、屋根裏の墨書(右記)からわかります。しかし暗くて狭てまだうまく写真が撮れませんので、写真是回をあらためて掲載します。

屋根裏の墨書

天照山大殿
向拝唐破風
維時明和七庚寅六月
新規造営
世話人 古川勘右衛門
脇 棟梁
藍田藤右衛門
石渡弥物右衛門
両

この時に新しく取り付けられた部材の金具下には風雨にさらされた跡(風食)がまったくありませんが、それ以前の部材の金具下には風食が見られることから、それまでの向拝には飾金具がなく、唐破風についていた明和7年になって初めて向拝全体に金色の飾り金具を取り付け、より華やかにしたようです。

写真14 飾金具を取り外した明和7年の部材



写真15 飾金具を取り外した向拝軒廻り材 金具下の風食や止釘痕が部材によって異なっている

向拝軒廻り材には後世の補足材や取替材が多くありますが、それぞれの部材の金具下の風食や金具を取り付た止釘痕の様子が異なっていることなど、それらの関係性から各々の部材や金具の時期、金具の取り合いや形状等が確認できます。

2 破風板の下側の巾3分の1程は明和7年に付け加えられたこと。それまで黒色に塗つてあった破風板を、その時初めて銅板で覆ったこと。そして懸魚を一度取り外して付け加えた板の下にもう一度取り付けたこと。

一頁の写真4 ↗ 部分は、そのほかの↗部分とは材料の木取(きどり)(木の使い方)や取り付け方が違い、短い材料を、表面から鎌(かすがい)で打ち付けていて、見かけを気にしていないようでした。また表面に風食が無く、着色の跡も見られないことなど周囲と明らかに様子が異なっていましたので、まずこの部分だけを取り外しました。

すると、



写真16 明和7年に付け加えられた部材の取り外し

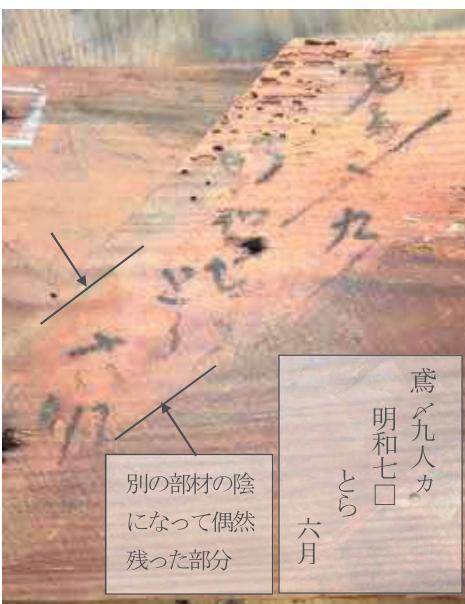


写真 17 付け加えられた部材の裏側に
(別の部材の陰になって) 残る墨書



写真 18 それ以前の部材に残る黒色
塗装痕 (写真10 白丸内にも有り)

この部分の材料の裏側からも、明和7年6月の墨書が見つかりました。また先立って取り外していた懸魚を、明和材取り外し後の破風板にあてがつてみたところ、懸魚に残る古い取り付け痕と破風板に残る古い取り付け痕とが一致することを確認しました。黒色塗装は部材に残っている塗料片を分析し、何が塗られていたかを確認する予定です。

取り外し作業は、日々の作業で気のついたことを確認する為の手順をその都度考えながら進める必要があります。初めの計画通りに作業が進められないことも悩みのひとつです。

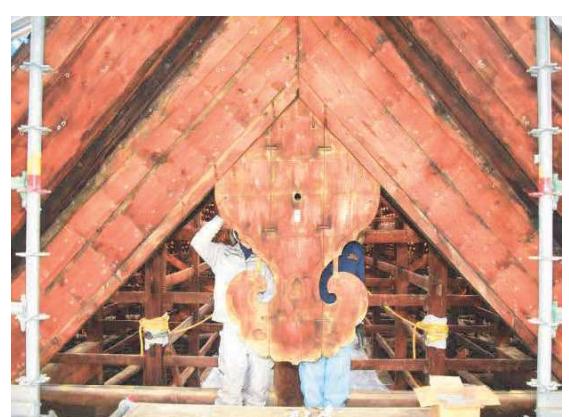


写真 19 懸魚をもとの位置にあててみた